

【外題】

里見八犬傳 第二輯 卷五

【本文】

南總里見八犬傳第二輯卷之五

東都 曲亭主人編次

第十九回

龜篠奸計糠助を賺す
番作遠謀孤兒を托す

却説庄客糠助は、怒に信乃を副けて、犬を暮六が背門に追入れ、計りし事は齟齬ひて、犬を失ふのみならず、咎餘わが身に係らん歎、と思へははやく逃かへりて、妻孥に縁由を告、「もし庄官より人來て問ば、在らずと答へよ」といひあへず、奥まりたる処に隠れて、衣引被て臥て見つ、起ても心安からで、いかに〜と思ふ程に、果して暮六が小廝來て、「糠助ぬし宿所にありや。我内政の呼せ給ふに、とく〜」といそがすを、しばしは在らずと欺く物から、使は櫛の齒を挽く如く再び三たびに及びしかは、今は脱るゝ路もなし。さはれ内政よりとかいへば、そのことならじ、と思へども、思ひかねつゝ出かぬるを、女房に諫られ、小廝使に引立られて、已こことを得ず使どもに、暮六が宿所へゆきけり。

當下龜篠は、子舎に、糠助を呼入れて、生平にはあらぬ莞やかに、ほとり近く招きつゝ、まづその安否を訊しかは、糠助は些おちゐて、いと蒼みたる顔の色、稍淺葱にぞ復りける。且して龜篠は、傍なる人を遠ざけて、貌を改め声を低うし、「俄頃こそなたを招くこと、定めてこゝろに覺あるべし。いかなれば稚蒙を副て、番作が獬犬を、村長の宅地へ追入れ、人を食せんと謀りしぞ。そなたと信乃が棒を曳、背門より逃て還りしを、小廝等に見られしかは、陳するに辭なかるべし。加 旃彼犬は、この子舎へ走り入り、是見給へ」と敗れたる、一通の書状を出して、推ひらきつゝつき著て、「かゝる珍事をしいだしたり。鎌倉の成氏朝臣、許我へ落させ給ひし後、この地の陣代大石ぬしも、両管領に従ひて、身は鎌倉にをはすれば、兵糧の事などは、わが良人に命ぜらる。これらはそなたのよく知るところ、改めていふにあらねども、此度又鎌倉より、許我の城攻あるべしとて、こゝへも兵糧催促せられ、管領家の御教書に、陣代の下知状を添給はり、けふしも飛脚到着せり。これによりてわが良人は、この子舎の塵を掃し、御書拝見の折もをり、件の犬が走り入り、四足にかけかくの如く、ばらりずんと踏裂たり。脱すべきものならねば、犬には遂に鎗つけて、数个所の疵を肩せたれども、猛してなほ死なず、板屏の下突破りて、外面へ逃たるが、途にて斃れしよしを

聞ねは、主の家^{ぬし}にやかへりつらん。御教書^{みまじり}破却^{やぶ}は謀反^{むぼん}に等し。畜生^{ちくせう}法度^{ほうど}をしらずといふとも、そのぬしは罪科^{とが}脱れ^{のが}かたし。いはんや犬^{いぬ}を追入^{おひい}れたる、そなたと信乃^{しの}はいかなるべき。百遍^{もくたひたい}大赦^{たいしやく}の時にあふとも、助^{たすか}りがたき命^{いのち}ならずや。固^{もと}より覚期^{かくき}ありての所^{ところ}為^な敷^か。番作^{ばんさく}は年来^{ねんらい}より、中^{なか}わるければ子^こに分^わけて、まさな事^{こと}をすればとて、そなたは何等^{なにどう}の怨^{うらみ}ありて、身^みの滅亡^{めつぼう}を見^みかへらず、よしなし人に荷^ひかたんで、長^{なが}を倒^{たふ}さんとするやらん。憎^{にく}き人^{ひと}かな」と怨^{うらみ}すれば、糠助^{ぬかすけ}は駭^{おど}き怕^{おそ}れて、冷^{ひや}き汗^{あせ}を流^{なが}すのみ。今更^{いま}にいふ所^{ところ}をしらず。且^{かつ}して頭^{かぶ}を擡^{もち}げ、「ゆくりなき越^こ度^たによりて、おのが命^{いのち}を召^よれん事^{こと}、脱^{まぬか}るべうも候^{まう}はず。件^{くだん}の犬^{いぬ}の事^{こと}に就^つては、長^{なが}わるかれとて、追^{おひ}入れたるに候^{まう}はず。然^さとても如此^{しか}々々、と陳^{ちん}じて免^{ゆる}さるべきにあらねば、大^{だい}慈^じ大^{だい}悲^ひを仰^{あや}ぐのみ。願^{ねが}ふは令^{あま}政^{まつ}提^{てい}擲^{ちやく}て、吾^わ侪^{なみ}ばかりは救^{すく}ひ給^{たま}へ。助^{たす}け給^{たま}へ」といふ声^{こゑ}も、枯^{かれ}野^のの虫^{むし}の鳴^な音^ねより、心^{こゝろ}細^こけに口^{くち}説^{せつ}けり。

龜篠^{かめぢやう}聞^きて嘆息^{たんいき}し、「人の頭^{かみ}たるものはかり、よにこころ憂^{うれ}きものはなし。好^よも歹^{わる}きも公^{こう}の道^{みち}もてすれば卻^{かへ}に、憎^{にく}むは人の私^ひにて、人^{ひと}を恵^{めぐ}めば職^{しやく}に缺^{かひ}、職^{しやく}を立^たれば邪慳^{じやくん}に似^にたり。綾^よ一^{いつ}すぎにするならば、そなたはさらなり番作^{ばんさく}親子^{おやこ}を、犇^{ひしく}々と捕^か捕^{つか}、鎌倉^{かまくら}へ牽^ひくべけれども、可^か愛^{あい}や親^{おや}の偏^{かたが}僻^{たが}にて、言^い一言^{いつごん}もかけさせぬ、信^し乃^のは現^{げん}在^{ざい}わらはが侄^{おひ}なり。憎^{にく}しと思^{おぼ}へど番作^{ばんさく}は、蔓^ま延^{えん}む弟^{あに}なり。そを一^{いつ}朝^{あした}に罪^{つみ}なはし、快^た愉^うとするときは、人^{ひと}たるものこころにあらず。いと痛^{いた}しく悲^{かな}しくて、怒^{いか}れる夫^{おつ}の袂^{たもと}に携^かり、泣^なつゝ勸^{すす}解^げてけふ一^{いつ}日^{にち}の、追^{つい}捕^ぼの沙汰^{さた}をとめてたり。とはかりにしてその罪^{つみ}を贖^{あが}すは脱^{だつ}れがたし。いかで救^{すく}ん方もがな、と人^{ひと}しらぬ骨^{ほね}を苦^{くる}しめ、いと浅^{あや}はかなる女子^{をなこ}の智^ち恵^ゑには、及^{およ}ぬ事^{こと}をかへすゝ、念^{ねん}じて僅^{わずか}に便^たりを得^えたり。番作^{ばんさく}が秘^ひ蔵^{ざう}せる、村^{むら}雨^{あめ}といふ一^{いつ}刀^はは、持^も氏^ぢ朝^{あさ}臣^{ぢん}のおん佩^{はい}刀^{たう}にて、春^{はる}王^{おう}君^{くん}へ讓^ゆせ給^{たま}ひし、源^{げん}家^け数^{すう}代^{だい}の重^{じゆう}宝^{ほう}なれば、管^{くわん}領^{りやう}家^けもよく知^ち食^{じやく}、得^えまほしと思^{おぼ}召^めよし、豫^よてその間^まえあり。今^{いま}彼^か宝^{ほう}刀^{たう}を鎌^{かまくら}倉^{くら}へ献^{けん}り、件^{くだん}の罪^{つみ}科^かを勸^{すす}解^げ奉^{ほう}らば、そなたのうへに恙^{しやう}なく、番作^{ばんさく}親子^{おやこ}も救^{すく}されなん。それ將^{しょう}弟^{てい}が我^がを折^せて、暮^く六^むどのに手^てを卑^ひすは、誰^{たれ}か又^{また}この願^{ねん}望^{ぼう}を、鎌^{かまくら}倉^{くら}へ申^ま上^あべき。かくまで思^{おも}ふわらはが誠^{まこと}を、なほ僻^{へん}心^{しん}に疑^{うたが}ひて、自^じ滅^{めつ}をとらはせんすべなし、そなたも覚^{かく}期^きし給^{たま}へかし。これらのよしを告^つげとて、かくは竊^{せう}に招^{まね}きし」と真^{まこと}しやかに説^{せつ}示^しせは、糠助^{ぬかすけ}魂^{たま}われにかへりて、思^{おも}はず太^ふき息^{いき}を吻^くき、「言^いつけ給^{たま}はり候^{まう}ひぬ。飲^の食^{じやく}には他人^{たにん}集^あり、憂^{うれ}苦^くには親^{おや}族^{しやく}聚^あふ、世^よ常^{じやう}言^{げん}はこれあるかな。年^{とし}來^{らい}は庇^ひを摺^すせ給^{たま}へど、姉^{あね}ならず弟^{あに}ならずは、何^{なに}人^{ひと}かこの危^{あや}窮^{きゆう}を救^{すく}ん。君^{きみ}を思^{おも}ふも身^みを思^{おも}ふ、糠助^{ぬかすけ}かくて候^{まう}へは、舌^{した}の根^ねのあらん限^{かぎ}り、富^ふ妻^{さい}那^なとやらんが辨^{べん}をもて、犬^{いぬ}塚^{づか}ぬしのこころを和^わげ、絆^こよくととのへ候^{まう}ひなん。そのときには第一^{だいいち}番^{ばん}に、僕^{わが}を救^{すく}させ給^{たま}へ。善^{ぜん}は急^{いそ}げといふことあり。はや退^{まが}らん」と立^たあがれば、龜^{かめ}篠^{しやう}雲^{うん}時^じと引^ひとゞめ、「いふまでに

はあらねども、成^なもならぬもけふ一^{いつ}日^{にち}ぞや。長^{なが}翁^{おきな}議^ぎに時^{とき}を移^{うつ}して、夜^よあけて後^{あと}悔^{くわい}し給^{たま}ふな」とい

へは頻にうち點頭、「其処は勿論女才なし。こゝろ得て候」と応もあへず隔亮を、逆手にとりて遽しく引開んとして推外し、倒れかゝるを見かへらず、逃るがごとく外面へ、身を横にして出しは、龜篠吐嗟と身を起して、倒るゝ隔亮を受とどめ、「さても龐忽の人かな」と呟きながら立著れば、次の間に竊聞せる、臺六は枚戸を開きて、夫婦目と目を注しつゝ、莞尔と笑て、「龜篠坎」「わが伏はことよく聞給ふや。思ふにまして首尾よし」といふ声に目や覚しけん、臺子のあなたに茶を挽かけて、睡臥たる、額蔵が、又挽いたす臼の音に、驚さるゝあるじ夫婦は、夕立雨の雷に、旅人いそぐ心地して、密語あへずも共に、納戸のかたへ隠れけり。

さる程に糖助は、踏む足更に地につかず、慌忙きそがまゝに、大塚が宿所に赴き、件の緯のはじめより、龜篠がいひつる事を、おちもなくあるじに告げ、「童の智慧に誘引れて、鈍くも事を惹出せし、僕を大人氣なしとて、叱り給はゞ勸解もせめ。只勸解たりとて免されかたきは、御教書の破損なり。さはれ彼鄙語に、地獄にもしる人あれ、といふは寔にこの事にて、腹きたなしこのみ思ひし。おん身が姉御前の菩薩心、任可愛しと思ふ誠が、則親之聚曇苦にて、吾侪もよき日にあひしなり。我つよきも事にぞよまる。宝は身のさし替なり。村長に手を卑たりとて、聊も恥にあらず。姉に降るは是順也。おん身が子とて弱くもなし。何事も子を見かへりて、この一議には折給へ。うけ引給へ」と手を合し、辭を盡して勸れども、番作騒ぐ気色なく、つくゝと聞果て、「御教書の事実はらば、驚き思ふも理り也。和殿その一通を、認てかくはいはるゝや」と問れて糖助頭を掻き、「いなおん身にもしられし如く、吾侪は固より無筆なり。御教書とこそ聞つるが」といへば番作冷笑ひ、「」されはとよ、人の心はさまゝにて、測りかたきものぞかし。笑の中に刃を隠すは、今、戦國の習俗也。親族也とて心放きは、臍を噬の悔ありなん。年來は讐敵のおもひをしる姉夫婦が、猛に弟をいと惜み、侄を愛するはこゝろ得かたし。又その事実にして、村雨の刀を出し、罪を贖んと謀るとも、赦されずは、無益の所行也。大刀だに過ぎば恙なしとは、何人が定めしぞや。管領家の沙汰ならずは、下より上を計る也。かゝればそれも憑みかたし。もし果して謀る如く、ゆるさるゝ事もあらば、鎌倉へ牽れて後に、大刀を進らするとともに遅きにあらず。和殿のうへはいかばかり心くるしく思へども、女々しく子ゆゑに騒屑して、不覚をとらば武士の瑕疵なり。その議には従ひかたし」といはれて糖助膝うち敲き、「いなゝそれは偏僻なり。疑ふてけふを過ぎば、後悔其処に立がたし。親子といへば三人が命、只一口の大刀を出して、救はるゝものならば、半响たりとも速きがよし。縹緖の恥に妻子を泣し、彼此人に指をさゝれ、辛して助りては、可惜武士に疵が著。思ひかへしてうけ引給へ。應といふ一声を、聞かでは宿所へ還られず。掌合して拝むは見えず

や。心つよし」とかき口説、縹果へうもあらざれば、番作ほとくもてあまし、「わが子一人がうへならば、八會にせらるゝとも、人の異見を何でふきくべき。かくても暁らぬ和殿が周章、只今覺すに由なければ、よく考て、返答せん。日くれて再び來給へ」といふに糠助外を見かへり、「背門の柳に緋日が落れば、今はや暮るゝに程もなし。夜食過して又來なん。もの識る人は人を謀りて、身を得はからぬ事多かり。あまりに人を疑ふて、糠助さへに殺し給ふな。且退らん」と片膝を、立てやうやく身を起す。足の痠痺を捺あへず、膝歩降たる沓脱の、人の草履を片足穿き、片足は穿ぬ洗走馬、憂は重荷と夕凍解に、趁跛曳つゝかへり去。

三月の天も冴かへる、秩父おろしの夕風に、衣めさせん、と親を思ふ、信乃は一室に手習の、机をやがて片つけて、花田色なる太織の、醫中羽織背より、推ひろげて父が肩に掛、出居のかたに掛けて置、行燈にはや点す灯の、八隅隈なく照さねども、庭より明き夕月夜、まだ息絶ぬ与四郎をおぼつかなげにさし覗き、兩戸一枚線かけて、父がほとりに火桶をよせ、「風がかはりて猛に寒し。日が長ければはやく過せし、夜食の雑炊煮くもまゐらず、物ほしうなり給はずや」と問は番作頭を掉、「身を動かさざるものを、三たびの外に何をか食べき。宵越の雑炊は、せんすべのなきもの也。餘りあらば復たうべよ。冷なばわるし、温めよ」といひつゝ火桶引よせて、はや埋火を掻起せば、「いなあまりとては候はず、與四郎にも與しかど、物食べくも候はず。よしなや大を救んとてかゝる難義に及ぶこと、皆是吾侪が所為也」と悔て詮なきことながら、今糠助がいひつるよしも大人の答も彼処にて、詳に聞て候ひき。御教書の事實ならば、禍既に遠からじ。固より大人ははじめより、知否たる事ならねば、そはいく遍もいひときて、吾身ひとつをともかくも、罪なはれん事勿論なり。賞期究めてをりながら、おん行歩も不自由にて、病を生平なるわが大人に、翌より誰か仕ふべき。日にく便なく朽をしく、いと病肩給はなん。これを思へは不幸の罪、來世をかゆるとも、贖ふに時なかるべし。そもいかなれば父祖三世、忠義は人に傳れても、実さへ花さへ埋木の、浮世に疎く月も日も、こゝに照させ給はぬにや。親を思へば惜からぬ、露の命もさすがにて、いとをしくこそ候へ」といひかけて鼻をうちかめば、番作は灰かき坦す、火箸を立て嘆息し、「禍福時あり。天なり命なり。憾べからず、悲むべからず。やをれ信乃、わが糠助に諭せしよしを、汝はよくも聞ざるや。御教書の事は、鈍くも謀る、彼人々の寓言なり。かばかりの伎倆もて、小児をば欺くとも、いかでか番作を欺き得ん。こは暮六が姉に誨て、糠助を賺しつゝ、宝刀を掠奪ん為のみ。いと浅はかなる所行ならずや。

抑この二十年年來、渠さまく心に盡して、村雨のおん佩刀を、奪ひとらんとしつるごとく、

幾遍といふをしらず。或は人をかたらひて、利に誘つゝ、價貴く、彼一刀を買んといはせ、或は更闌人定りて、牆を踰鎖を窺ひ、盗とらんとせし夜もあり。渠百計を施せば、われ又百の備あり。この故にその悪念、今に至て果すによしなく、いと朽をしく思ふなるべし。尔るにけふはからずも、渠わが犬に傷けて、その鬻骨を遣すものから、こゝに悪念復起り、御教書破却に假托て、宝刀をとらんず奸計は、鏡に写して照ることし。抑年來墓六が、望を宝刀に被ること、われそのこゝろを猜たり。渠わが父の遺跡と稱して、莊官にはなりたれども、相傳の家譜舊録なし。われもし件の大刀をもて、家督を争はゞ難義に及ん。これ一ツ。成氏朝臣没落のち、この地は既に鎌倉なる、両管領の處分によれり。渠は則管領の、敵方家臣の遺跡にして、舊功舊恩あるものならず。新に徴忠を顕さずは、莊園永く保ちかたけん。渠がおそるゝ二ツ也。よりて村雨の一刀を、鎌倉へ進上し、公私の鬼胎を祓除きて、心を安くせん為也。われ既に姉の為に、その莊園を争はず。いかでか一口の大刀を惜ん。しかはあれども件の宝刀は、幼君のおん像見、亡父の遺命重ければ、この身と共に滅ぶとも、姉夫には贈かたし。又その初村雨を、成氏朝臣へ進らせざりしは、姉をおもふのゆゑのみならず、春王安王永壽王、みな持氏のおん子なれ共、わが父は春王安王、両公達の傳たり。この両公達撃れ給はゞ、宝刀を君父の像見として、おん菩提を甲奉れ、と親の遺訓を養たるのみ。永壽王へ進らせよ、といはれし事はなきぞとよ。われはこの義に仗ものから、汝が人となるのちに、件の宝刀を督殿左兵衛督に、献せて身を立させん、と思ひにければ年あまた、賊を禦きて秘おきつ。今宵汝に譲るべし。見よや」とばかり硯笥なる、刀子を撈りとり、

梁に

【挿絵】「番作遺訓して夜その子に村雨の太刀を授」「しの」「犬塚番作」「帶雨南」「楚知春北入燕」「つるぎ大刀さやかに出る月のまへにノ雲きれて行むら雨の空 玄同」

釣し大竹の、筒を目かけて丁と打ば、釣索弗と打断て、筒はそがまゝ礮と落、両段に割れてあらはれ出るは、是村雨の宝刀也。番作は遽しく、錦の囊の紐解かけて、恭く額に推あて、雲時念じて抜放せば、信乃は間近く居なほりて、鐔根より刀尖まで、瞬もせずうち熟視る。煌々たるかな七星の文、照耀て三尺の氷寒し。露結び、霜凝て、半輪の月かと疑ひ、邪を退け、妖を治めて、千載の宝と稱す。唐山の太阿龍泉、我邦の抜丸蒔鳩、小烏鬼丸などいふとも、是にはまさじと見えたりける。

且して番作は、刃をやをら韃に納め、「信乃この宝刀の奇特をしるや。殺氣を含て抜放せば、刀尖より露霑り、鬻を砍、刃に舂れば、その水ますゝ潰りて、拳に隨ひ散落す。鬻は彼村雨の、

樹杪を風の拂ふが如し。よりにて村雨と名づけらる。これを汝にとらせんに、そのさまにては相應からず。誓を短くし、今よりして大塚信乃、戊孝と名告れかし。かねて二八の春をまちて、をここにせんと思ひしかども、われ宿病に苦められ、ながく存命かたきをしれり。けふ死すは翌死ん。よしや雲時は死なでをるとも、今茲の寒暑は心もとなし。只恨む、汝僅に十一歳、孤とならんことを「といひかけて又嘆息す。親の顔をうち瞻り、」こは何事を宣ふやらん。縦刃病にましますとも、おん年五十に満給はず、なんでふさる事候へき。尔るをけふよ翌よとて、よからぬ祥を急せ給ふは、御教書の事実にして、搦捕るゝ事あらば、おん身捕兵を引うけて、吾翁を救ひ給はんと、おん底意に候はずや。勿体なし」といはせも果す、呵々とうち笑ひ、「御教書の事詐欺なれば搦捕るゝ咎もなし。然ながらわが姉の、詐欺にもあれ糠助に、汝が事を懇切に、いひ來されしこそ幸なれ。死期遠からぬ親が瘦腹、今面たりにかき切て、汝を姉に托んず」といふにいよゝ呆れ果、「おん言葉とも覚ぬものかな。身親けれども彼人々は、大かたならぬ冤家なるに、故なくおん身を喪ひて、冤家にその子を寄し給ふは、こゝろ得がたく候」と語れば、父はうち點頭、「その疑ひは理り也。これぞ則わが遠謀、村雨の大刀も奪れず、今より姉の手を借りて、汝を人と成さんのみ。とてもかくても存命かたき、親が自殺は子を肥す、苦肉の一計なりとしらすや。わが姉夫婦は利に耽り、恩義をしらぬ性なれども、今、番作が自殺を聞かば、里人いよゝ長を憎みて、集合てその非を訴ふることもやあらんと、咄むべし。しからんには眞實やかに、汝を家に養とり、実意を示して里人等が、憤を解なるべし。又この宝刀は姉夫婦が、いかばかりに賺すとも、素より親の遺命あり。人と成る後許我へ参りて、督殿にこそ献らめ。この事のみは羨引かたし、と固く阻みて常住坐臥に、その盜難を禦げかし。宝刀全く暮六が手に入るにあらずといへども、亦その家にあるときは、奪ふに易しと心放して、緯急には逼るべからず。これを防ぐは汝が智にあり。惣に宝刀を隠さば、奪んとする心弛す、防ぐといふ共竟に畧れん。便是黄叔度が、琴を鼓して群賊を、退けしといふ謀におなじ。募兵成るに堪すして、よく敵を疑せ、危けれども還て安く九死を出て一生を得んことは、寔に大智の徳なれば、機に臨み変に應じ、防がはなどか禦さらん。念じてこれを忘るべからず。又わが姉夫婦、漸に、志を改めて、實に汝を憐まば、汝も亦誠心もて、仕て養育の恩義に報へよ。又その害心已すして、遂に禦ぐに術なくは、宝刀を抱きて速く去れ。五年七年養るゝとも、汝は大塚氏の嫡孫たり。暮六が職祿は、汝が祖父の賜ものなり。その祿をもて人となるとも、伯母夫の恩にはあらず。縦報はで去ればとて、それを不義とはいふべからず。これらの理義もおもふべし。謀る所かくのごとし。長くもあらぬ餘命を貪り、この期を過

して後竟に、病の床に息絶なは、伯母も汝を養はず、宝刀も人の手に落て、謀りし事は画餅とならん。このおん佩刀は君父の像見、首陽に蕨を採ずといへども、一君に仕ぬ番作が、最期にこれを借奉りて、奇特を見せん」と村雨の、宝刀を再びとりあげて、抜放さんとする程に、信乃は喉で拳に携り、「後々まで誤せ給ふ、豫て覚期のおん自書は、飽まで吾儕を思召す、おん慈みをわきまへしらで、禁め奉るには候はず。よしや難治の病者なり共、おのが心の及ん程、良薬良医に手を竭させて、看とり冊き奉り、遂に届かぬものならば、うち歎きても待るべし。これは正しく見定めたる事とてなきに腹切給はゞ、人只狂死とまうさまじ。今宵に限ることかは」といはせも果す声を激し、「虐げきことをいふものかな。死すべき時に死されば、死するにもます恥辱かり。嘉吉のむかし結城にて、得死ざりしは君父の為、寔となりしより、筑摩に三年の僑居、母の今果にあはざりしは、生る甲斐なき恨みなり。それよりして卅年あまり、なす事もなく偷食の民となりつゝ露命を貪り、今又子孫のつへを思はで、いつまでか存命へき。千曳の石は轉すとも、わが心は轉すべからず。禁るは不幸也。今にもあれ糠助が來ることあらは妨せん。其処返すや」と敦圍て、左手を伸して揉かへせば、鬚断離れ、髪さへ紊れて、転輾つゝ携たる、右の拳を庇も放さず、「おん叱りを蒙るとも、この事のみは御ころに恃りて禁め待るかし。ゆるさせ給へ」と沈著、刃をとらんと喘逼れども、小腕に及ぬ必死の勢ひ、放せ、と怒の高声、子はなほ齎縁の一生懸命。果しなれば番作は、わが子を楚と推伏て、背に尻をうちかくる。病衰ても勇士の働き、こは何とせん哀しや、と信乃は悶ていく遍か、反かへさんとしつれども、恩義の壓に愛著の、枷も鉄輪も推居られて、又せんすべはなかりけり。その隙に番作は、襟かきわきて袷衣、推袒きて刃を引抜き、右の袂を巻そえて、氷なす刀尖を、腹へぐさと突立て、こゝろ靜に引違せば、さと漬る鮮血の下に、布るゝその子は血の涙、親は刃をとり直し、さすがに弱る右の手に、左の拳もちそえて、吭のあたりを刺んとて、突外しつゝややくに、咽喉を劈き俯に、仆るゝ親と身を起す、信乃も半身韓紅。そがまゝ父の亡骸に、抱き著つゝよゝと泣。その形勢は秋寒き、風にはふれし鶯もみぢ、更に枯木に寄る如し。

浩処に糠助は、番作が回答聞んとて、暮て又來る庭門に、近づく隨に信乃が泣声、緯こそあらめ、と拔足して、且外面より窺へば、思ひかけなきあるじが自殺に、駭きおそれて舌を巻き、毛骨いよ立齒根は合す、戦出して留らぬ、膝を押して裡面へは得入らず、立かへらんと思へども、生平にはあらで足重く、誰は留ねどわが腰を、引すえらるゝ心地しつ。辛じて庭門のあなたへ出て息をつき、先はや緯の趣を、長に告ぐ、と裾端折て、飛が似に走去けり。

信乃は涙の曝布の糸、くる人ありともしらずして、哽かへりつゝ哭きしが、さてあるべきにあらざれば、われから心をとり直して、やうやくに頭を擡、「朽をしやわが年の、今四ッ五ッますならば、刃の下に折敷れて、親をは死し奉らじ。声を限りに泣はとて、又、夜とゞもに口説はとて、絶てその甲斐なき親の、おん為になるべうもあらず。御遺言の趣は、耳に留り腸に、染渡りつゝ露ばかりも、背くべうは思はねども、錦の囊に毒石を、裹る如き伯母伯母夫に、養れん事望しからず。加以謀られて、宝刀を奪ひとられなば、この身の不覚、なき親へ、申とくへき辭はあらじ。戦場には、父子共倍に、討死するもの往々多かり。憑しからぬ伯母をよすがに、后おぼつかなき世を渡らば、還て父祖の名をくださん。親ありてこそ憂にも堪にき。今よりして誰が為に、百折千磨の艱苦を忍ん。御遺言には稱すとも、行步よわき家尊の大人、追著ておん手を引、櫛出の山路をもる共に、踰て母御にあひ侍らん。嗚呼尔なり」とひとりごち、僅に父が手を放せし、村雨の大刀とり拏て、灯にさしよせてうち返し、打かへし見て、「奇なるかな。水もて洗ひ流せし如く、焼刃に鮮血を染ざりけり。親には似ざる信乃が自殺も、このおん佩刀をもてせん事、いと有がたし」と推戴く。

折から檐下に藁孤敷て、臥たる大は深痕の苦痛、堪すや長吠する声に、信乃は喆と見かへりて、「阿、与四郎はまだ死ざりけり。彼犬を獲てわれ生れ、彼犬ゆゑに父を喪ふ。そのはじめを聞、終を思へば、愛すべく又憎むべし。然とてもこの畜生を、捨おかん事不便なり。よに生かたきこの鎗痕。通宵苦痛をせんより、速にわが手にかゝれ。畜生が死を促すに、かゝる宝刀を穢しなば、いとも恐きわざなれども、鮮血に染ざる刃の奇特、亦是誰が為に惜ん。いでや苦痛を助けて得させん。聞くやいかに」と問かけて、大刀を引提て縁頬より、閃りと下りてふり揚る、刃におそれず與四郎は、やゝ前足を突立て、項を伸してこゝを切れ、といはぬばかりの健氣さに、大刀振あげし拳もよわり、われには年もひとつまして、年来親の養たて給ひ、馴も狎著し現身の、いぬをばいかで砍るべき、と思ひおもはず躊躇しが、「さるにてもこの物はかり、雲時はかくてをるとても、翌を得またで息絶すは、又伯母夫の手に死ん。心よわしや。如是畜生、發菩提心」と念じつゝ、閃す刃の下に、犬の頭は撲地と落、さと潰る鮮血の勢ひ、五尺の紅絹を掛たるごとく、激然としてその声あり、聳然として立冲る、中に晃く物こそあれ、と左手を伸して受留れば、鮮血の勢ひ衰へて、遂に再び潰らす。信乃は霽る刃の水氣を、袖に拭ふて、遽しく、鞆に納めて腰に帶、彼削口より出たる物を、濃血拊除てつらゝ見るに、是なん一顆の白玉也。その大さ豆に倍して、紐融の孔さへあり。緒締などいふものならずは、必これ記總なり。思ひかけなき物にしあれば、こゝろに深く

訝りて、いと明かりける月の光りに、さし翳し、復見れば、玉の中「丁」の文字あり。方是孝の字也。現刀して鑑れるにあらす。又漆もて書るにあらす。造化自然の工に似たれば、小膝を拍て感嘆して、「吁可なるかなこの白玉。妙なりけりこの文字。われそのよしを知らずといへども、情思ひ合すれば、わが母子を祈し、瀧の川よりかへるさへ、途にこの犬を見て、愛て見過しかたくやありけん、將て又家路にいそぎ給ふに、

【挿絵】「自殺を決て信乃與四郎を愼る」「番作」「の」「の」「龜さん」「ひき六」

現に神女を目撃し、「一翹の玉を授けらるるを、愼て受外し、玉は大のほぐりに鞭ぶを、とらぬとて、索給ふに、遂に又あることなす。この比よりして有身給ひて、次の年秋のはじめに、吾儕を掌給ひしとぞ。母の告させ給ふにてしりぬ。そのうち家母の長き病著、佛に神に祈ひし、駢なければ、もしその玉の失たる故に年々病て、遂に危窮に至らせ給ふ故。いかで索て件の玉を、再び獲なば母の病著、順快給ふ事もや、と望をこゝに被たれども、見もせずそれとて玉の、求めて出へきよしなければ、家母はその冬身まかり給ひ、それより三年のこの秋今宵、家尊の自殺に吾儕さへ、冥土の侶と手にかけて、劊にし大の瘡口より、不思議に出る玉匣、二親ながら畏ひし、われも覺期の今果に及びて、わが名を表る孝の一字、信乃が実否は成孝なり定かに見ゆる玉ありとも、六日の菖蒲十日の菊也。何にすべき「とつち腹たて、庭へ發石と投棄れば、玉はそがまゝ反かへりて、懐へ飛入たり。怪しと思へど搔撈とりて、又擲ては飛かへり、とび返ること三たびに及べば、呆れ果て手を又ぎ、靈時按じてうち點頭、この玉意に灵あるもの故。家母が落し給ひしとき、犬が吞たればこそ、十二箇年の今に至りて、歯牙堅固に、毛の光澤枯せず、その血氣さへ衰ざりしは、腹にこの玉あればなるべし。かくれば是ニツなき、世の重宝にぞあらんすらん。縦隨侯趙璧たりとも、わが命すら惜からぬに、宝に惑ひて死を止まらんや。貴人の亡骸には、珠を含し奉る、例はあれども又、宝を瘞て無益の所為也。宝刀も玉もわがなき後に、人とらば取れ。いざさらば、大人に追つき奉らん。時移りぬ」と咳きて、舊の処にかへりし、父の死骸に推並び、既に最期の坐を占て、宝刀を三たびうち戴き、まづ諸膚を推袒つ。と見ればわが左の腕に、大きやかなる痣いで来て、形状牡丹の花に似たり。こは何ぞいかにと、腕を曲て、つら〜見つゝ推拭ふに、手習の墨などの、苟に塗しにめらす。その色黒き痣なれば、思はず腕をうち敲き、「きのふまでもけふまでも、われにこの痣あることなし。嚮には玉が飛かへりて、懐に入りしとき、左の腕へ破と中りて、些痛をおぼえしか、それ將痣著べうもめらす。國の傾んとするときに、くさ〜の妖孽あり。人の死んとするときに、又妖怪を見ることあり、と親のをしえも、漢籍にも、豫て見つるは是なりき。皆是

おのが惑まよひにこそ。死ししては土つちになるものを、痣あざも黒くろ子こも厭いとほんや」と勇ゆう氣き撓たがぬ稀まれ世せいの神じん童どう、智ち恵えも言語ごんごも古こ人じんに愧はぢず。甘かん羅ら、孔こう融ゆう、幼よう悟ごの才さい、今いま又またこゝにこの子こあり。自じ殺ころの覚かく期ごぞいとをしき。春はるの夜よなれば短みじくて、はや初し夜よ告つる寺てら々々の鐘かねも無む常じょうの音ねすなり。信し乃のは額ひたひの乱みだ髪がみを、かき揚あげて宝た刀ちを手に把とり、「嗚あ呼あわれながら後おくれにけり。考こう妣ひ尊そん灵れい一いち蓮れん托たく生せい、南な無む阿あ弥だ陀ぶつ佛つ」と唱となつゝ、刃やいばを晃きらりと引ひ抜ぬて、腹はらを切きらんとする程ほどに、忽たち地まち庭ぢまの樹こ蔭かげより、「やをれ信し乃の等ら、まぢ給たまへ」といともせわしく呼よびかけて、男なん女にょ三さん人にん立たちあらはれ、飛とが似ごとく縁えん頬がほより、齊ひとしく一は走はり入いりにけり。